

ドナウ通信

No. 43

目 次

| | | |
|--------------------------------------------------|-------|----|
| 『1956ブダペスト』刊行余話 | 糠沢 和夫 | 2 |
| ご挨拶 | 野田 悟 | 4 |
| ブダペスト日本人補習校の子供たち | 園部 文夫 | 5 |
| 補習校便り | | 10 |
| 補習校児童作文 | | 12 |
| 川辺 佳 大田 寛朗 上原 彩香 橋本 輝久 山中 雅子 | | |
| 園部先生最終授業-「人類は滅びない」 随想 | | 15 |
| 「ウィーン遠征記」秦 隆司 | | 18 |
| 「食料に思うこと」今野 幸人 | | 21 |
| 20世紀を創ったハンガリー人列伝（その一） 「アンドリュウ・グローヴ」マルクス・ジョルジュ | | 23 |
| 映画時評 | | |
| サボー・イシュトヴァーン監督『サンシャイン』 | | 30 |
| 掲示板 | | 36 |

『1956ブダペスト』刊行余話

糠沢 和夫

一・本の経済学

私は現場主義者だ。何でも肌で学ぶことにしている。

今度の本もやってみて勉強になった。まずターゲットとなる日本の青年に買ってもらえるよう、CDの価格より一寸安く、消費税5%（一〇〇円）込みで二一〇〇円に価格を設定して、五千部つくることにした。四千部を東京で販売、五百部はここで実費頒布、五百部は両国各方面への献呈である。献呈は最終的には七百部ぐらいになる。

やるまで判らなかつた要素が、次々に出て目を開かれた。消費税分を抜いた二〇〇〇円のうち、小売りが三割、出版社が三割で、六割が自動的に引かれるので、手取りは一冊八〇〇円になるのである。つまり、それ以下にコストを納めねばならない。

印刷はブダペストでやることにした。これは正解だった。注や解説、地図までつけて、三六〇円で仕上がった。写真も一〇〇枚以上あるし、それを質のよい印刷にすると、東京では一〇〇〇円以上はかかる。

輸送料は航空が一冊あたり二七〇円、船だと一六〇円、航空便一、船便三、という比率で送れば平均一九〇円前後でおさまる。残るは著作権と印刷前コストだ。これを一冊当たり約二六〇円でおさえた。印刷後のコストも少しかかる。帯、スリップ、正誤表とかだ。

献呈本は、自分が作った本を自分人がにあげるのでも出版社の倉庫から引きだすのに、五〇〇円納付しなければならぬ。だから、本をつくるには付き合いが少ない方がコストは安くなる。しかし友人が少なければ、口コミで売ることはいかない。

結局献呈の分だけ純損失になるだろう。国会図書館に三〇冊、販売ネットに三十冊。まず無料で納めさせられる、

というのも知らなかつた。若いときに本を二冊書いて原稿料をもらった頃は、全然コストのことなど考えなかつた。

今度館のスタッフと一緒にやって、ハンガリー人の気質、ペースなども頭に入った。やはり一緒に仕事をしてぶつからないと真の姿は露頭しない。コシュート印刷のアッティラさんに日本語入力ソフトを贈呈したから利用をおすすめする。アッティラさんは今でも日本人と仕事をしたがっている。

二・インタビューさまざま

訳本だから、正確に訳すためには当時の雰囲気や背景を知らねばならない。結局八人とインタビューをしたが、それとは別に、あるワインの産地を訪れた時にハツと思ったことがあった。ワイン技師（女の人）が、ブダペスト工科大学出だと言っているので、何の気なしに「一九五六年の革命が始まった所だ」といつてみたら、「そうなの、女友達の兄がその犠牲になつて命を落とした

の」と声が急にぐもった。一九五六年の死者はまだ冷えきっていない。この国の政治を理解するのに、「一九五六」は第一補助線だといってよい。ポングラーツというこれも一九五六年革命の時にコルビン横丁の市街戦の英雄だった人に会ってみた。革命後、アメリカに逃れて、小金をためて帰ってきた人だ。体制が変わってからハンガリーの飛行場に帰ってきたときに、大勢の市民が歓迎の旗を振ってくれたことを語ったとき、彼は嗚咽した。彼の故国訪問は、翌年永久帰国に変わった。

この人だって、片時もハンガリーを忘れずに何十年もアメリカで人生を過ごし、家族をアメリカにおいて帰国してまだ一〇年足らずだ。「一九五六年」は呼吸している。この人は、自分の傍らで倒れていた戦友の名を指折り呼んで泣く。そして言う。「許せない人達がいる。自分は彼らを弾劾する。だって『一九五六年』の戦友たちに済まないもの」死者と対話している日常だ。

与える光線によって歴史の意味が違うということに深く学ぶものがあった。「今さら治安警察(AVO)の罪を問おうとは思っていない。しかし一言きちんと誤ってもらいたい」という人もいた。この人は牢に在る間に妻が他の男の胤を宿してしまった。つらかった獄中の日々を登った山の話をするように、微笑みながら振り返る人もいる。その人がパン屑で作ったペンダントの写真を日本版のカバーに使ったらカバーに柔らかな祈りが加わった。

待ちぼうけをくったアメリカの介入についても、「こちらが手前勝手な希望をもっただけ」と冷静に振り返る人もいた。また、「ラジオ放送(VOA)なんか私は聞いていない、そんな外国の扇動など聞かなくともオレは飛びだしたさ」という人。胸を打たれたのは「アメリカ軍が来なくてよかった。米ソの戦車でハンガリーの国土を争われたら、国民も国土も踏みつぶされていただろう」という

人がいた事だ。どのインタビューでも、聞く方も語る方も涙がたぎり落ちた。

日本語版は、原著者に断って、現在の写真を左に、五六年当時の写真を右においた。希望が現実には到達するのはやり切れない。現実の中にいつも灯るのが若い頃の微笑と夢とひたむきさであってほしいからだ。

館員と深夜まで共同作業をやったのも愉快だった。私が根負けして公邸に帰ったあたりもスタッフは徹夜でやってくれた。ハンガリーの要路の人に今度の翻訳の話をすると目が輝く。交流というものは相手が知ってもらいたいものに興味を持つことだ、と教えられた。

(注)「1956ブダペスト」はうさぎ屋、平成クラブなどに預けておきます。一部東京で二一〇〇円(税込)、つまり約五〇〇〇フォリントですが、当地では三〇〇〇フォリントで実費頒布しています。読み終わったら、親戚の青年や高校・大学の先輩に上げてください。その理由は読むと判る。

「挨拶」

野田 悟

二〇〇〇年度の日本人会長を務めさせていただきます野田でございます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。さて、昨年後半から日本ではオウムが沈静化したかと思っていましたら、異常な事件やら変な人達が数々報道されています。

「お受験殺人・心の戦い」、「小学生殺人・てるくはのる」、「少女監禁男」また「これが世界の定説」の高橋氏、「最高ですかーあ」の福永氏、「復活のエネルギー」の加江田塾などなど。個人主義。都会化が進み、人と人の触れ合いが少なくなり他人のことには干渉せず、そこで疎外感を持った者がだんだん自分の世界に閉じこもって行った結果、ある者は異常な爆発を起こし、またある者は異常な救いの世界に没頭して行くと言つことだし

よつか。

こんな日本の風潮ですが、日本を離れて海外で暮らしておりますと、人との、また家族の繋がりが、また自然に密接になっていると感じませんか？

日本人会の目的も会員相互の親睦と互助であり、日本人会との係わりの中で皆様がより一層潤いのある海外生活を送っていただくことにお役に立てればと念じております。

永住の方も、駐在の方も、留学生も皆さん今年も楽しい一年にしましょう。

と言つことと、以下が今年の日本人会の活動予定です。皆さん奮つてご参加下さい。

九月一七日(日)

運動会(補習校共催)

一〇月一日(日)

第二回ソフトボール大会

一二月九日(日) 総会

ドナウ通信 年四回発行

三月一二日(日) 室内ゲーム大会
五月一四日(日)

第一回ソフトボール大会

六月二一日頃 巡回健康診断

六月二五日(日) 遠足

(SZILVÁSÁRAD 予定)

補習校

ブダペスト日本人補習校の子どもたち 日本人社会の手で

子どもたちに未来を

園部 文夫

宇宙人の集団と地獄の日々

日本で「帰国子女」と言うと非常に響きがいい（イメージが良い）が、実際は大変な苦勞がつきまとう。

ほとんどの子は海外の生活が初めてで、英語やハンガリー語は全然話せない。その状態で国際学校（アメリカンスクール）や現地校に行くしかないのは、悲惨である。泣く泣く学校に行く日々が始まる。外国にいれば、子どもは自然に外国語ができるようになるというのは迷信でしかない。実際は、大変な日々と努力をしなければならぬ。

英語の勉強をするのと、英語で勉強するのは、天と地ぐらいの差がある。

数学なら英語で問題を聞いて、問題を理解して、英語で文章を組み立て、英語で書き、英語で説明しなければならぬ。三平方の定理を日本語で勉強して、英語に直すではない。日本語でも子どもたちにはかなり難しいこれを、英語で考えるのだから大変である。英語で知識を獲得するのは難しい。また、英語を母国語とする子どもたちと、議論したり勉強したりするのは簡単にできるものではない。日常会話は二、三ヶ月で何とか身に付くが、英語で勉強するには更に何年も努力が必要である。

どうしてハンガリーに来たの？

「帰国子女」と「留学生」は違う。留学生は、自分の意思で外国を選択した。しかし、帰国子女のほとんどは、親の仕事で外国に来なければならぬ。

ほとんどの子は、日本に居たいと思っている。友人や祖父母など家族と別れたくないのは、自然な気持ちである。

転校でさえ子どもにとっては、大変なストレスで転校したくないと泣く子どもも多い。ましてやその転校先が外国では、大泣きしたくもなるだろう。

「なぜハンガリーに行かなければならないの？」この言葉ほど親に辛い思い言葉は無いだろう。親には、行かなければならない理由があるが、家族や子どもはそのために大きな苦勞を背負うことになる。

辞令は企業・官庁（日本の社会）から出るのだから、親だけでなく日本の社会や企業は、海外にいる子どもたち一人一人の幸せや未来に責任がある。子どもたちは何も言わないが、その声はしっかりと受けとめてほしいと思う。

わたしたちは日本人？

このような苦勞をした海外の生活

も、いつかは終わりが来る。いよいよ日本に帰国するときが来る。それを待ち望んでいたはずの子どもたちが、いよいよ帰国が近づくと落ち着かなくなる。日本で上手くやっていけるだろうか？学校の勉強は大丈夫だろうか？日本語は大丈夫だろうか？残念ながら、すべて大丈夫と言ってやれないのが現実である。

日本では、日本語ができて当たり前なのだ。日本の習慣や常識が身につけていて当たり前なのである。外国から帰ってきた子どもにあわせて、社会は変化しない。変化しなければならぬのは「帰国子女」の方で、日本の子どもたちではないのが現実である。それだけでなく、同じ日本人どうしでも上手く行かず、いじめが大きな問題となっている現状では、日本の子どもたちに変化できるだけの余裕もないのも事実である。

国際学校や現地校で地獄の日々を過ごし、やっと言葉も生活習慣も慣れ

てきたのに、今度は日本に同化するために大変な努力をしなければならぬ子どもたちの気持ちは察するにあまりある。外国では「日本人」と疎外され、帰っても日本では「外国人」扱いでは…。

日本人学校が一番！

この様な子どもたちにとっては、日本人学校がなじみやすく抵抗が少なくて一番である。少なくとも日本語・日本文化が確実に身に付き、外国語バイリンガルになれなくても日本人にはなれる。帰国後の問題も少ない。

日本の教育は、文部省が学習指導要領に基づいて一斉に行なっている。日本のどこでも同じ教育が受けられることは素晴らしいことである。一方教科書や学習計画などは、かなり厳密に決まっており、小学校一年から中学三年まで継続して発展的に進められている。教科の一部分が抜けてしまうと、その後の学習にもずっと障害をきた

すことになる、日本人学校ではこのリキュラム完全に実施している中で、帰国後や転校程度の差ですむ。（もちろん日本人学校に転入する際も抵抗は少ない。）

しかし、日本人学校以外の子どもたちは、日本人学校の様にはいかない。筆算の仕方だけでも国ごとに違うので、日本語が不足しているだけでなく、帰国後日本の学校になれるのは、大変な努力が必要である。

しかし、ここでは児童生徒数の確保や資金の調達などの問題があり、現状ではすぐに設立することは難しい。

ブダベスト日本人補習校の役割

いくら問題を嘆いても、現実には変化しない。私たちは、この子どもたちの現状を少しでも良くなるよう、子どもたちがハンガリーに来てよかったと思えるよう、元気に自分の未来に希望が持てるよう、ここで教育活動と支援活動を行なっている。

しかし、一般の日本人が抱いている「帰国子女」とは、「外国の文化（外国語）も日本の文化（日本語）も完全に身につけた高い能力の子どもたち」である。また日本政府や社会は、子どもたちが日本の国際化を進めていく中心的な存在になることを望んでいる。国際化を進める担い手が「帰国子女」だと、私は考えていないし、「帰国子女」の現状が正しく理解されていないことに不満はある。帰国子女の実態を正しく理解するように努力していかねばならない。

しかし、（現状は無視できないので）私たちはできる限り日本人が抱いている「帰国子女」に近い子どもたちを、大変難しいことだが保護者と共にここで育んでいくよう努力している。

半分の時間で日本の子どもたちより優秀に？

日本の学校の授業日数は、最低二一〇日（通常二三〇～四〇日程度）。小

学校高学年で、国語は二一〇時間、算数は一七五時間、社会・理科一〇五時間である。中学校一年では、国語一七五時間、数学一四〇時間、社会一四〇時間、理科一〇五時間である。

補習校では、高学年の授業日数が九五であるから、国語・算数が九五時間、社会・理科を合わせて九五時間。中学校が九八日なので、同様になる。実際の授業時間は、日本の半分以下である。さらに国際学校・現地校の勉強や努力、放課後授業を行なう疲労度を考えると、補習校がかなり厳しい状態におかれていることが分かる。

それでも、「帰国子女」（「外国の文化（外国語）も日本の文化（日本語）も完全に身につけた高い能力の子どもたち」の水準に近づけるためには、教科書の内容はある程度完全に学習しなければならぬ。「時間は半分で、内容は日本の学校並に、できればそれ以上の学力を。」言うのは簡単だが、子どもたちにとって、保護者にとって、

補習校にとって、これがどれくらい難しいことか、どんなに困難なことであるか…。

教師は最大の教育環境

このような厳しい環境の中で、上記のような目標を達成するには優秀な教員がどうしても必要である。幸いブダペスト日本人補習校は準全日制であるので、毎日授業がある。そのためフルタイムで教育に当たる専任講師を確保する可能である。

アメリカやその他の国では、土曜日だけの週一回の補習校なので教員の確保が難しい。授業時間の少なさと合わせて、日本語の習得が困難になる要因となっている。

教育は人が行うものなので教える人によって、結果は大きく違っていく。熱心な先生に教えてもらうのと、週に一度他の仕事をもちながら教える先生では、結果は自ずと違ってくる。

世界中の補習校で抱える問題は、教員の確保にかかっていると云っても過言ではない。

補習校は、三人の専任講師を確保し、複式学級を取らず学級担任制（一学年一クラス）を取っている。これが補習校が成果を上げている最大の要因である。教員は学校にとって最大の教育環境なのである。

ブダペスト日本人補習校の教員

補習校は、日本の学校とも条件が違っているため、特殊な技能と専門性をここで身につけていなければならぬ。また、その様な経験豊かな教員を育成するには時間もかかる。

補習校の教員として資質としては、
一・子どもが好きである。

二・教員免状は教職経験など、教育の専門的な知識がある程度身につけている。

三・ハンガリーでの生活経験があり、国際交流に意欲的で子どもたちの手

本となること。

四 研究熱心で授業や研修に熱心に取り組み、向上心のある人。

五・ハンガリー語又は、外国語を身につけていること。

六・子どもたちの気持ちが分かり、相談相手になれる人。

良い教育は、良い教員から

授業は午後四時から六時半まであるが、午後一時より職員は出勤し事前に授業計画を作成し、教材を準備して授業に臨んでいる。また、派遣教員を中心に授業研究や相互の授業参観を行ない、授業の向上に努めている。更に、国内で行なわれる研修会にも派遣し、また研修のためウィーン日本人学校と交流も始めている。

少ない時間で効果的に授業を行なうには、教材の研究や授業の進め方、板書や発問の仕方、自作教材の開発などは欠かすことができない。文部省派遣教員の主な仕事は、その指導と研修

に当たることである。

教員の資質の向上が、授業の向上に子どもたちの教育の向上になる。優秀な子どもたちを育てるには、まず優秀な教員を育成しなければならない。またその様な教員は、資質だけでなく日々の研究・研修の中で育っていくものである。

また教員の育成には、長い時間がかかる。育て上げた教員は、安定して雇用し、教育に専念させる必要がある。教員が短時間に変わることは、教員の養成だけでなく、子どもたちの教育に一貫性が欠け、混乱を招くだけである。
将来を見据えた教育

ブダペスト日本人補習校では、補習校ながらパソコンを整備し少ない時間ではあるがパソコン教育も行なっている。これは、近い将来 INTERNET を通して情報を収集し、自分の情報を発信する社会が来ると予想しているからである。その時代が来る前に、INTERNET、E-MAIL、ホームページの

作成などの基本的な情報やパソコンの操作の仕方を教えていかなければと考えている。この様に我々は、常に将来を見据えた教育を行なっている。また、その様なものには日本の学校以上に力を入れ、良い環境を子どもたちに提供していきたいと考えている。

また、日本では情報があふれ、ゲームとテレビで本を読む子どもが少なくなっている。しかし、幸いここではゲームのソフトもテレビも少なく子どもたちは読書をする時間や習慣を身につけている。その様な子どもたちに、よりよい本を提供するのも補習校が力を入れている仕事の一つである。読書量では、補習校の子どもたちは日本の子どもたちを凌いでいる。

一人一人ができることを

補習校は、子どもたちの教育に責任を持って当たっている。「補習校があるので安心してブダペストに来られる。」「補習校があって本当に助かつ

た。」「帰国後も日本の学校にスムーズにとけ込めた。」などと嬉しい言葉をもらえるようになってきている。

しかしながら、補習校だけでは教育を行なうことはできない。教育には多大な費用がかかる。良い教育を受けるには、それに見合うだけの費用を負担しなければならぬ。国の補助と保護者の負担だけでは、その費用をまかなえなくなってきた。教員の確保には、多大な費用が掛かる。しかし、それに見合うだけの費用を支払わなければ、良い教員は確保できない。そのためには、商工会をはじめ日本人社会の多くの人々の協力と資金援助を仰いでいるのが現状である。

子どもたちにも我々教員にも、残念ながら資金を生み出す力がない。子どもたちができることは、苦難に負けず一生懸命勉強すること。我々ができるのは、より良い教育を子どもたちに提供しよう授業の充実と環境を整備することである。しかし、資金の調達

ができなければ補習校の経営が成り立たず、補習校で教育を続けることはできない。それでは子どもたちが、あまりにもかわいそうである。

最後に、ここで行なわれている素晴らしい教育が継続できるよう、今後とも日本人社会の一人お一人の一層の支援と協力をよろしく願います。みなさんのお力で、子どもたちに明るい未来と希望を提供してほしいと思います。

ブダペスト日本人補習校

Budapest Japanese School

(Address)

c/o Morics Zsigmond Gimnazium

H-1025 Torokvesz ut 48-54 HUNGARY

TEL/FAX +36-200-8856

E-MAIL bjpschool@pronet.hu

<<mailto:bjpschool@pronet.hu>>

Homepage <http://www.hoshuko.hu>

補習校便り

二千年を迎えたかと思っていまして、月日が経つのは早いもので、補習校では、また「お別れ」と「出会い」の季節を迎えました。

さて、補習校では三月十八日に卒業式、修了式を行い、平成十一年度を無事終了しました。ここで、平成十一年度三学期の行事を中心に補習校の様子をお知らせします。

一月二十九日、珍しく良い天気にも恵まれたこの日、日本大使館の多目的ホールをお借りして、恒例のカルタ・餅つき大会を行いました。お父さん、お母さん方の力と心のこもったお餅をほおばりながら、子供達も、ヴィライニヨシユ小学校の子供達と一緒にお餅をついたりする光景が見られました。一方カルタ大会では、どのチームも真剣そのもの。今回は、上級生、下級生に分かれて総当たり戦を試みま

した。シーンとした会場に、読み手の声と子供達のカルタを見つめる熱い眼差し。白熱した戦いの末、下級生の部では、三年の青木亮太君、上原康士郎君、川辺佳さんチームがなんと全勝で見事優勝。上級生の部では、六年の上原彩香さん、橋本輝久君、山仲雅子さんチームがおしくも一敗を喫しましたが優勝を果たしました。ヴィライニヨシユ小学校の子供達も今年は二回目とあって、すぐろくや剣玉等で遊んでいる子も見られました。この紙面をお借りして、関係する皆様方やお世話になった保護者の方々に改めてお礼申し上げます。

二月十二日から十三日にかけて、六年生以上の上級生はシヨブロンへ現地学習会へ出かけました。この時期に2週間以上のMYA(国鉄)のストライキの真つ最中とあって、今回はバスで出かけることとなりました。少々時間がかかりましたが、無事シヨブロンへ着きました。思いもかけずシヨブロ

ンで日本語を教えている工藤 紀恵さんが、お友達のハンガリー人のガボさんと一緒に待っていてくれました。ガボさんの流暢な日本語で、シヨブロン旧市街やその逸話等色々教えていただき、子供達も皆、口を揃えて楽しかったと感想を語っていました。また、二日目にはフェルトードにあるエステルハージ公の宮殿を訪れました。ここでも、愉快的ガイドのおじさんに出会うことができ、予想以上の見学内容となりました。ハンガリーの歴史や自然を、自分達の目や足で勉強しようという目的で始まった現地学習会ですが、今年は、思いもかけない出会いによって、その成果は倍増したようです。毎日を現地校と補習校に追われている子供達ですが、ハンガリーという国に暮らした証をこれからも見つけていって欲しいと思います。

三月十八日には卒業式と修了式、また、園部派遣教諭の離任式、その後続いて、児童生徒主催による「卒業生を

送る会」が今年も行われました。

最後に、今年度卒業された生徒を紹介致します。

小学校六年生の上原 彩香さん、橋本 輝久君、山仲 雅子さんです。小学校二年から補習校に通っている三人です。校舎は変わることなく、中学校へ進むわけですが、勉強内容も責任も一段と難しくなることでしょう。それぞれが目的を持って、また新しい気持ちでスタートして欲しいと願っています。

文部省派遣教員として三年間、ブダペスト日本人補習校に勤務した園部 文夫が無事任期を終え帰国しました。子供を最優先に考える姿勢で、数々の試みや提案を実行し、新しい事に職員と共に挑戦してきました。その結果が現在、実を結びつつあります。これからも、継続してこれらの試みを発展させていくつもりです。

園部先生の三年間の努力に感謝するとともに、保護者や大使館や商工会・日

本人会などご協力いただきました多くの皆さまに、改めて御礼申し上げます。園部先生の日本での、さらなるご活躍を生徒、職員一同お祈りしております。

そして現在、ブダペスト日本人補習校の新学期が始まっています。四月一日に入学式と始業式を行いました。本年度は小学校に七名、中学校に四名と多くの新入生を迎えました。さらに、日本より新しい派遣教諭 吉原 稔 祐が着任しました。新しい気持ちで子どもたちも職員も一生懸命がんばっています。どうぞ今年も、皆さまの変わりにないご支援とご協力が頂けるよう宜しくお願い致します。

作文

マジックシヨール

三年 川辺 佳

わたしは、アメリカンスクールで、マジックシヨールをしました。一人一つのマジックをやります。自分のマジックシヨールのポスターを作ったり、シルクハットをかぶったり、いろいろな洋服を着たりして、みんなが楽しめるようにくふうしました。わたしたちは、ようち園の子たちをマジックシヨールによびました。

わたしがおもしろく思ったマジックシヨールは、「水かびん」と「なぞのフライパン」でした。水かびんは友だちのマールがやりました。マールは、出てくるとおじぎをして、「わたしは、今からこの花に水をあげます」と言っていて、自分が持っていた花びんを水でい

っぱいにし、花に全部あげました。でも、もう一回さかさまにすると、また、あのからっぽの花びんから水が出てきました。

なぞのフライパンは、ナオミがやりました。ナオミは、フライパンを開けて、「わたしは、これから紙を二つに切つて、このフライパンに入れます」と言いました。ナオミがフライパンのふたをとじて、十数えて、フライパンのふたを開けると、さっきの二つの紙が、また一枚の紙にもどっていました。

わたしは、「ふしぎなせんす」をやりました。わたしは、せんすをとじて、「だれか、このせんすを開きたい人はいませんか」と言つて、上にいた男の子にわたしました。男の子は、開くとこわれていたのでびっくりして、「ごめんなさい、こわしちゃったの」と言いました。わたしは、せんすを開いて、「こわれてないよ。」と言いました。わたしの番が終わると、先生が、「マジックシヨールは終わりです」といい、

ようち園の子たちは、先生といっしょに自分たちのクラスへ帰りました。ようち園の子たちが帰った後、先生はわたしたちたちをほめてくれました。楽しかったです。

次の日、クラスに入つて行くと、先生が、「ようち園の子たちから手紙が来ているよ」と、言いました。カードには、ようち園の子たちの名前と、「マジックシヨールによんでくれて、ありがとう」と書いてありました。

ハンガリーに来て

五年 太田 寛朗

ぼくは、十一月に山口県からハンガリーに来ました。来てすぐに大雪が降ったけれど、山口はめったに雪が降らないので、おどろきよりも、うれしさの方が強かったです。

もう一つうれしかった事は、長ズボンで学校に行ける事です。それは、ぼくが前にいた学校は制服があったので、冬でも半ズボンで行かなければならなかったからです。

アメリカンは想像していたよりもずっと楽しいです。給食はおいしいし、P・E・もほとんど遊びみたいな感じですか。そして、週二回ぼくの好きなパソコンの授業もあります。日本とちがって一人一台使えます。ただ、英語がほとんど分からないので、退屈な授業もあります。クラスに色々な国の人がいるのに、話げできません。早く英語

が分かるようになりたいです。

補習校の人は、みんな親切です。けんかもないそうです。補習校の日は、七時頃家につくので、おなががすいている日はふらふらです。おにぎりが必要かな？月に一回イベントがあるのも楽しみです。でも、ぼくの好きな理科の授業が少ないのは、ちよつと残念です。

ぼくの前の学校には、ホームページがあります。ハンガリーのぼくの生活を、メールしています。今までに、大雪と霧氷のデジカメ写真を送りました。こちらでたくさんのご意見を発信したり体験したいです。その情報を山口のみんなに知らせてあげたいです。

六年生、終わり？！

六年 上原 彩香

私が小学生生活の中で一番楽しか

ったのは、六年生の時の夏合宿でした。低学年の時から行って、六年生になると一泊じゃなくて二泊になるから、それをすごく楽しみにしてました。でも、学年が上がっていくと小さい子の面倒とかを何人もみるのが大変でした。結構楽しくしてたけど。

その合宿には、「てつちー」とかもいて、友達が増えました。前から友達だった子も前よりも仲良くなったりしたけど、帰っちゃった子とかもいます。また、「さやちゃん・ちえちゃん」が三月に帰るから、ハンガリーにいる友達が減っちゃいます。だから次の合宿は、「さやちゃん達」がいなから、すごく寂しいです。

あの合宿の二日目は、みんな女の子が一緒の部屋になって、色々話したりしてました。それにボーリングとかテニスとかもやって、楽しかったです。

他に楽しかったのは、六年生の時の遠足です。友達と一緒に歩きながら話したり、一緒にお弁当を食べて、その

後遊んだりするのが好きなんです。でも、小学六年生の次は中学生で、また行けるからそんなに変わらないんですよね。日本だと校舎が変わるから、小さい子とふれあうことがないけど、ハンガリーは同じ校舎だから、学年が上がるとう責任感とか持たないとダメなのでがんばります。

来学年からはさやちゃん達がいないのですごく寂しいです。また、友達が減っちゃいます。でも、新しい友達とも仲良くなって、一緒にいろいろなことをしたいです。

二〇〇〇年

六年 橋本 輝久

一九九九年の最後の日をモナコと言う国でむかえました。そこは、世界で二番目に小さな国だそうです。ハンガリーより暖かい所でした。

ぼくの家族の泊まるホテルの近くに港があり、そこでミレニアムのお祝いが行われるようでした。そこで、夜にはそこに行くことにしました。

夜ご飯を食べた後、港に行き二〇〇〇年を待っていました。さすがに夜は寒かったです。チロスという食べ物についてきた溶かしチョコレートが固まってしまいました。

その夜で一番困ったことは、周りがバクチクや花火をいっぱい使ったことです。特にバクチクはともうるさくてこまりました。カウントダウンが始まると、バクチクなどがそこら中に投げられ、ともうるさくなりました。「三、二、一、〇」大きな花火が始まりました。ついに二〇〇〇年です。

小学校に通った六年間

六年 山仲雅子

この六年間で私は色々な事を学び、色々な事を体けんしました。一年生のころはよく覚えてませんが、二年生の時はよく覚えています。私が初めてハンガリーと言う国にきたのは、そう二年生の時でした。英語も分からない私は、すぐアメリカンスクールに行くことになりました。でも言葉が分からなかったのですが、ただ他の子のしていることをまねするしかなく、とつてもさびしかった一番初めの日はよく覚えています。やがて、補習校が始まり、友達もいっぱいできたけど、やっぱり一番初めの日はこわかった。

それから三年生、四年生と無事に時間が過ぎていきました。でも、その間に私は、日本語を忘れかけていました。補習校でもちゃんと勉強はしてだけれど、日本語を使う時間が少なくなっ

たからでしょう。五年生になり、アメリカンスクールの校舎が変わりました。今までは宿題なんかほとんど出てこなかったのが、宿題も山のように出るようになり、勉強はぐっと難しくなるので目が回る毎日でした。補習校でも勉強が難しくなり、私は補習校の勉強に追いつけなくなってきました。

そして、とうとう六年生になってしまいました。宿題も少なくなり、ちょっと気が楽になりました。でもすごく悲しい事がありました。私は、漢字がよくわからなくなっていたのです。そこで、すぐ漢字の勉強に力を入れていったのですが……。相変わらず、まあまあな点しか取れません。中学生になったらましになるといいな？

園部先生の最終授業

人類は滅びない（未来は明るい）

園部 文夫

未来はとてもおもしろい。十年前に自分がブダペストにしていると、想像できた人はいたでしょうか？十年後にいたい自分はどこにいるか、予想できるでしょうか？未来は分からないからおもしろいのです。

でもどういうわけか、日本人の未来への予想は暗い。私が子どもだったころは、人間はいつかは第三次世界大戦をやらかし、核戦争で滅びると考えていました。ノストラダムスの大予言は、もしかしたら当たるかもしれないと思っていました。（残念？幸運？なことに予言は外れた）新聞やテレビでもたくさんの方が悲惨な未来を予想しましたが、当たった人はほとんどいま

せん。（もちろん間違えたことを謝ったり、訂正した人もいない。どうも過去の事実の間違いいには厳しいが、未来については責任はないらしい。）とにかく破滅はやってこなかったし、大方の未来の予想は当たらなかった。（映画や小説・SF・アニメはこの手の未来予想が多い。）

だから、これから未来を生きるみなさんは、このような社会のいいかげんな未来の予想に惑わされてはいけません。（読んだり見たりして楽しむのはいいですが、信じてはいけません。）私がこのことに気がついたのは、一九八九年にベルリンの壁が崩れて、さらに東西ドイツが平和的に統一したのを見たからです。夜中テレビの報道を見ながら、未来は明るいと思いました。その時に自分が東側の国ハンガリーに来るとは全く思っていませんでしたが、社会科の教師として、ベルリンの壁崩壊後の東側の国を見ることのできたのは貴重な体験でした。

(実は、一度ベルリンを訪れ冷戦の壁を、あのテレビで見たところに行ってみようと思っていました。しかし、仲間先生に「東側の国にはみんな同じ様で、東西ベルリンの違いは、ブダペストとウィーンの違いと同じですよ。」と言われて、それはもっともだと考え行くのをやめました。でもやっぱり見た方が良かったと反省もしています。悲しいかな、派遣教員は簡単にハンガリー国外には出られないのです。)

未来は分からないので、子どもたちや若者は不安に陥りやすいものです。しかし、一方だれも予想できないから生きてみないと分からない。(ここが一番大切！)

だいたい宝くじだって、競馬だって、一分や一秒後だって正確に予想できる人はいない。(いれば競馬や株でみんな大金持ちになっているはずだ。)だれも実は未来など分からずに、適当に(真剣に)生きているのです。生きると言うことは、自分を信じて適当に

(真剣に)人生を賭ける様なものです。だから、いくら安全に賭けても絶対に勝つという保証はない。

未来を生きるみんなに言いたいことは、未来が分からない以上しっかりと自分を賭けることです。学校を選ぶのも、会社を選ぶのも、仕事を選ぶのも、恋人や結婚相手を選ぶのも、負けても悔いのないように納得して賭ける(選ぶ)ことです。

君たちの周りには、うさんくさい未来の予想屋がいっぱいいます。(中には親切や好意でやっている人がいるからやつかいです。)学校はどこがいいとか、会社はここがいいとか、仕事は何がいいとか、恋人はだれがいいとか(これは言う人はいないか)。。。でも、最後に決めるのは自分です。自分以外に自分の人生を選ぶ人はいません。(他人の人生に口出しし、自分が選んだ人生を他人に強制するのは許されません。でも、多くの人は他人の人生に口出しし、うわさや批評を

するのが好きです。)他人に惑わされて、自分が納得できないものに賭けたら(選んだら)不幸ですよ。負けても自分以外だれも責任はとれませんから。(あなたのせいで自分は失敗したなんて言うことはできません。人がどう言おうと選んだのは、やったのは自分ですから。。。それは、言い訳でしかありません。)

選ぶために助けになるものは、自分の経験と勉強です。勉強は、覚えることや計算することだけではないのです。よく分からないと選びようがないでしょう。国語や社会は、自分以外の人の人生や世の中の仕組みや成り立ちを教えてくれますし、数学や理科は物事が正しいかどうか判断するのに役立ちます。友達や先生との出会いも、自分の人生を選ぶのに大いに役立つはずです。(勉強は、人に順番をつけたり、人間の優越を較べたりするものではありません。日本では勉強が人間の優越をつける物差しに使われてい

るところがあります。本当に残念です。偏差値なんて、未来に対しては何の役にも立ちません。(ハンガリーでの経験や国際学校・現地校での勉強や経験は、みなさんがこれから人生を選ぶときに大いに役立つはずです。

私の人生もみなさんよりは短いですが、残りの人生を賭けてみたいと思います。日本の教育問題は深刻ですが、自分なりの答えを用意して、頑張ってみるつもりです。

地球の温暖化も環境破壊も食糧危機も民族紛争も教育問題も完全に解決することは無いかもしれませんが、みんなが努力すれば何とかかなります。未来はきつと明るいと思います。(これも予想です)とにかく生きてみなければ、やってみなければ分かりません。でも、やる前から日本の社会のよう

人類が滅びちゃ元も子もないのですから(世の中がどんどん悪くなる、未来は暗い。そんな卑怯な人の言葉や報道を信じてはいけません。

幸せな未来をつかむチャンスは、みんなが持っています。未来は素晴らしい世界になるはずですよ。素晴らしい未来に賭けないなんてもったいないですよ。

随 想

ウィーン遠征記

秦 隆司

ウィンブルドンで単複合わせて二〇回も優勝しているキング夫人をして“テニスの完璧な技術を習得するには人生が三回必要よ。”と言わしめたスポーツ。また、南米の大富豪をして、“人生で巨万の富を築いたが、残りの人生で、酒、マリファナ、テニスのだれを選ぶかと言えば、当然 テニスだよ。”とも言わしめたスポーツ。

テニスは、それ程技術の深化が困難とされ、同時にプレイヤーを恍惚とさせるのに充分過ぎるといわれます。そんな、テニスの虜になっているブダペストのフリーク達のちょっとした、戯言と思っ読んで下さい。

テニス環境には比較的恵まれてお

るブダペストで、皆様は友人達と、また家族の方といろいろなコミュニティーでそれぞれテニスを楽しんでおられると思います。偶々、筆者は土曜日の昼過ぎと日曜日の午前中に“TALENTUM TENNIS CENTER”なるテニスクラブの屋内コートにて日本人男性の有志にてテニスをしております。このコミュニティーはちゃんとテニスをやって来た方がかなりおられ、同時にテニス中毒とも思われる先輩方も代々所属しておられました。この戯言が掲載されますころには既に日本への帰路に就いておられると思われる大使館秋山氏もその主力メンバーのお一人で、前々から彼が持つておったアイデアで、ウィーンの人会と対抗戦を是非帰国前にいうことになり、自他ともに認めるテニス中毒の筆者もお手伝いすることとなり、今回の実現の運びとなりました。(秋山さんのアスリートとしての実力は皆様ご存知でしょうが、テニスも上手

いというより、良く走り、良く拾うテニスをされます。勿論、全てのショットが申し分有りませんが)

去る二月十九日(土)より翌日迄、場所はウイーンの南東部にある“OBERLAA TENNIS CENTER”、参加者それぞれ土曜日のウイーン市内でのシヨッピング等の用事を済ませ三々五々、夕方現地集合。参加者は、馬場夫妻、江田夫妻、秋山夫妻、山下夫妻(特に奥様がお上手)、高島氏(現在単身赴任、三月末に家族引纏め)、そして筆者夫婦。試合前日に、二時間も練習する程の全員大変な熱の入れ様。開催される場所の TENNIS CENTER はウイーンでの植物祭の後地利用の総合スポーツ娯楽施設の中にあり、二〇面からなる屋内テニスコート、ジム、温泉ジャグジーにホテルが併設され、温泉は三六 前後でハンガリーに比べ比較的低温ですが、ジャグジー&サウナとも清潔感があり素晴らしい施設でした。コートも大体空きがあり、とても東京のテニス環境とは比較にならず、日本のテニスは暫く世界には設備の点からも“かなわぬわ

い”と悔しくも不思議な思いを新たにしましたものです。

ホームページ・・・www.oberlaa.atにて、サイトに入ってみて下さい。全部ドイツ語ですが、その環境設備の素晴らしさの一端に触れることが出来ると思います。

練習の後、全員で楽しく中華料理にでもということになり、ホテルで適当な場所を聞いて出掛けたまでは良かったのですが、何せ慣れぬ場所、道に迷い偶々道を聞くべく入ったオーストリア料理屋でドイツ語しか通じず、結局予定変更ここで作戦会議同時に総決起大会となりました。しかし、あれほど紳士、淑女があり誰もドイツ語が話せないとは今にして思えば、翌日の我々の運命を暗示しておった様であります。また、同時に酒の好きな方が少なくなく、翌日の体力をかなり奪う程楽しい会となってしまうのも残念でした。

(実は、美味しいレストランで、料理

を選んで決めて下さった高島さんのナイスチョイスに深謝)

翌二〇日(日)、午前一〇時からの試合開始に向け我がブダペストチームは真面目にまた一時間ほど練習。こころあたりからすっかり“佐々木小次郎”になってしまった感あり。敵方ウイーンチームは午前一〇時になっても中々現れず、三々五々現れたが、ウエアからしてどうお見てもスマートとは言えず、事前に一度にプレーしたところのある秋山氏の言葉通り、実力とも当方がやはり上かと、“取らぬタヌキの…”

順番に対抗戦の仕来りに従い自己紹介、後試合開始。三面のコートに順に 男子NO.1、NO.2、女子NO.1が入り試合開始となりました。テニスに不案内の方へ、若い番号詰まりNO.1からの実力順で、当チームの男子NO.1はエースの馬場・江田組、NO.2は秋山さんの実力を借り秋山・筆者組。NO.3は流れに上手く乗れたのか何と

か辛勝。しかし、試合終了後、応援に
ZOOの試合コートへ行ってみれば、
これがナント苦戦しているではない
か。正直、馬場・江田組は馬場さんの
勝負強くシュアーなテニスに江田さ
んの切れのあるプレーがマッチして、
大変強いチームです。日本でしたらそ
んじょそこらのクラブプレーヤーには
ちよつと負けそうもありません。それ
が、かなり変則的なプレーをする敵方
ZOOに大変戸惑っている様子でこれ
を挽回するのはドラスチックな戦術
を取る以外には無いといった状況。し
かし試合はそのまま、**“GAME-OVER”**。
ゲームカウント四六。

あとの試合は組み替えて合計一〇
試合ほど行ったも皆、どうも波に乗り
きれず結果は結局二勝八敗にて我ブ
ダペストチームの負け。
試合後の懇親会で、エースをブダペ
ストに温存して来たとか、前日飲みす
ぎたとかいっても、所詮は後の祭り。
(今回は参加出来なかった野田夫妻

(三菱)、吉田さん、青木さん(住友)、
尾崎さん、そして山名さん、ごめんな
さい)

テニスで大切なのは、**“3C”**のこ
と。**“CONCENTRATION”**、**“CONTROL”**、
“CONFIDENCE”です。前日からお祭
り気分であったので集中力は多少欠
けていたのが、同時に花の都ウイーン
に浮かれ自己制御を忘れたか、そして
自信はおるか多少過信はなかったか、
反省しきりであります。次いでに、自
論を一つ、おっさんテニスを上手く楽
しむには、もう一つ**“CONTRIBUTION”**、
を加えては如何かと。詰まりは、ダブ
ルスのパートナーへの献身、また所属
するコミュニティへの献身、そして
テニスへ理解を示してくれている家
族への貢献ではないでしょうか。

食糧に思ひこむ

今野 幸人

「シャンドル・ヨージェフ・ベネディクが、春の暖かさをカバンにつめてやって来る」、この三人のネーム・デー（三月一八、一九、二一日）を境にぐつと春が近くなる、とハンガリー人から聞いた。今年は雪がちらつき、多少の誤差が生じたようだが、それ以降は確かに春らしくなってきた。

そこで、少々乱暴な結びつけ方ではあるが、春と言えば、それぞれ思い浮かべるものがあると思う。「出稼ぎからの無事帰還、何台ものトラクタのけたましい音、田植えの準備」。いきなり吉幾三の世界にでも入ったようで恐縮だが、秋田で百姓のせがれとして生まれた自分の春のイメージだ。

昔からの米単作地帯にあるわが家の稲作耕地は三町歩、一反当たり一〇俵以上の収穫はある。しかし、昭和四〇

年代後半から減反政策の波が押し寄せ、いまや米の作付面積は二町歩を切った。

「おまえは給料取りになれ。」時分の小さい頃から、親父が言い続けてきた。その当時から、稲作だけで生計を立てることは、もう無理と判断していたようだ。

この間、稲作コストの低減をはかるため、農業機械の協同利用、転作奨励を受入れた地域特産の栽培、いろんな取り組みを試みてはいるが、どれも家族経営主体の地域農業を活気づける決め手とはなっていない。もちろん、産直、無農薬栽培などコスト高を付加価値で補いながら生き残りをはかる稲作農家もいる。わが家のようにニツチ農業にもチャレンジできず、後継者がハンガリーに出かけてしまった農家は、もはや出口が見えなくなってきた。

稲作農家が振るわなかつた要因として、まず、日本人の食生活の変化が挙げられる。経済的に豊かになるにつれ、食べ物のニーズはより多様化した。平

成九年の一人当たりの米消費は、昭和五年の約六割まで減少し、逆に肉の消費は約六倍に増えた。これに伴い、海外から飼料用穀物など安価な農産物輸入が急増、平成一〇年の農産物の総輸入額は三五〇億ドル、じつにハンガリー国家歳出予算の二倍以上の額だ。

かくして、日本は世界最大の農産物純輸入国になり、食料自給率は、カロリーベースで四〇%、穀物自給率は二七%と先進国中、異例に低い水準に落ち込んだ（米、英、仏、独など先進国の穀物自給率は、一〇〇%以上）。これは、世界一七八の国・地域の中でも、一三五番目の穀物自給率に位置する。

農業は自然条件の制約を強く受ける。気候により生産量が変動しやすく生産には一定の期間を要する。基本的に農産物は、まず、それぞれの国の国内消費に仕向けられ、余剰分が輸出に回されるのが常だ。一旦、輸出国で大不作が発生したら、いくら日本が茶碗を差し出しても、お鉢は回ってこない。

国連の推計によれば、二〇二五年には、世界の人口は八〇億人に達する。この人口に対する食料を確保するためには、かなりの増産を必要とするが、世界の耕地面積は、環境悪化の影響もあり、簡単には拡大できそうもない。「人口大国」である中国も、経済状況が豊かになるにつれ、食生活に変化が生じ、いずれ世界の穀物需要逼迫のキーマン・プレーヤーになると見られている。

平成五年に発生した戦後最大のコメ大凶作。この年、農水省は、タイ米を緊急輸入した。このことによりコメの国際取引価格は高騰し、他にもコメを必要としているアジア諸国にとって困った事態となった。幾ら経済協力を実施していても、迷惑を被ったこれらの国は、日本をどう見るであろうか。「衣食足りて礼節を知る」、空腹は、礼儀・節度を感わす元か。

このように、食料の高い海外依存度・自給率の低下に対する不安要因を数え挙げたらキリがない。

「エネルギーだつてその大半を海外に依存しているのだから、食料だつて無理に割高な自給をする必要はない」と言われる向きもあるかもしれない。しかし、日本の生命線を何本も外国に握られているのは、あまり気持ちのいいものではない。一本でも少なくなる努力をするに越したことはないのだ。日本に農地はあるのだから。

最近、農水省では自給率を向上させる検討を開始した。食料自給率の目標を設定し、生産・消費の両サイドからの取り組み、更に安定的な輸入（食料の輸入先の分散化をはかる）、備蓄とのコンビネーションで食料安全保障を確立していく内容だ。

ところで、ハンガリーのトルジャー農産物・食料品のPRが主目的だ。昨年、豚、牛などの生肉の日本への輸出が解禁された。これは、日本側が牛や豚の病気である「口蹄疫（こうていいえき）」

の発生が無くなったことを確認できたからだ。しかし、野菜・果物については、一部を除き、病害虫の問題がクリアされていないため、輸出できない。

訪日中、農業関係議院と会談した中で、トルジャー農産物大臣は、「ハンガリー産の生鮮野菜・果物は世界的に見ても美味しい。この味が分からない人は本物の味が分からない」と、力説したらしい。確かに、パプリカやトマトなど数種類の野菜は、美味しい。しかし、多くのハンガリー産野菜・果物は、日本向けに品質改善が必要だろう。リンゴなどお世辞にも美味しいと言えないのだから。サクランボなどは、食べると、中から何かの幼虫が「こんにちは」と出てくることもしばしばである。これでは、日本の消費者には絶対に受けない。ましてや、日本のスーパーには、半分腐りかけた野菜・果物は、陳列されたりはしていない。日本の食料安全保障の一環としても、輸出に向けたハンガリー側の努力を期待する。

二〇世紀を創った ハンガリー人列伝

(その一)

アンドウリユー・グローヴ
(グローフ・アンドラーシュ)

マルクス・ジョルジュ著

盛田常夫 編集・翻訳

ハンガリー動乱

グローフ・アンドラーシュはブダペストに生まれ、マダーチ高校に通った。この若者は化学専攻を選んだ(一九五五年)。彼がブダペスト工科大学で学び始めて二年目に(一九五六年)、ソ連支配に反対するハンガリー動乱が勃発した。

「当時、僕は学生で、他の友人たちと一緒に、デモに加わっていた。それから、ロシア兵が我々の地域に発砲してきた時には、地下の石炭貯蔵庫に隠れていた。おっかなびっくりで、回りの石炭を突き刺し、思い切り深呼吸して、それから国を離れることにした」
(*International Herald Tribune*, 19 Nov. 1956)。

「彼は一番仲の良い友達と西方のオーストリア国境に向かう列車に飛び乗った。二〇マイル先に警官の検問所があるのを知らされた。聞かされた話は無慈悲なものだった。ロシア兵は国中を探し回り、片っ端から逮捕しているという。彼等二人は国境に向かって赤軍と競走しなければならなかったのだ。そこで、有り金を集め、勇気を振り絞り、せむしの密輸入からロシア兵がまだ知らない秘密の抜け道を教えてもらうことにした。」
そして、数時間経ち、彼はオーストリア国境に近い草原の泥濘に顔を沈

めていた。「いったい、どこら辺にいるんだろう」。兵士たちが行き交い、犬が吠え、灯りが闇夜に照らされる。その時、ハンガリー語の叫び声が、恐怖で身を凍り付かせた。「そこに居るのは誰だ」。四〇年も経って、苦笑いしつつその時の記憶を呼び起こしながら、彼の眼光が引き締まった。あの密輸入が裏切ったのかと首をすぼめた。「畜生めが、やってくれたか」と思ったという。その男はもう一度叫んだ。そこで、ある限りの勇気を出し、少年はこう答えた。「僕たちはどこに居るんですか」。「オーストリアだよ」と答えが返ってきた。雨だれが降り注ぐように、安堵の気持ちが一と体を走った」(*Time*, Jan. 5, 1958)。

国外に逃げるのは命がけだったが、国内に残るのことも辛い決断だった。動乱の参加者への追求が始まることは目に見えていたからだ。工科大学のグローフの学年はすべての専攻を含めて二二〇名ほどだったが、ハンガリー

「動乱で半分以上が国外へ逃げた。ミ
ンタ高校時代にエトヴォシユの物理
学コンテストで二位になり、工科大学
の物理学専攻でグローフと同学年だ
ったアルパード・チュルガイはこう回
想する。

「五六年の秋の授業がなくなり、講
義が再開されたのは翌五七年の二月
だった。最初の授業でシモニイ教授が
我々に向かって、祖国に残る決断をし
た学生に感謝の言葉を述べ、“私もま
た君たちのように、無条件で祖国に残
ることを決断した者の仲間だ”と語り
かけたのを今でも忘れない。そして、
こう続けた。“祖父母や両親が、カル
パチア盆地でハンガリー語を話す共
同体を守るためにここに留まり、働き、
そして苦しんできたことを忘れては
ならない。祖先に習って、一〇月初め
に手を休めた仕事をもう一度再開し
よう”、と」。

一九一八年生まれのカーロイ・シモ
ニイは、一九五二年のブダペスト工科

大学の教授に就任し、同時に国立物理
学研究所の創設に加わり、原子物理学
部門の長になった。一九五六年の動乱
勃発に際して、国立物理学研究所の革
命評議会議長に選任された。これが理
由で、一九五七年には物理学研究所か
ら排除され、原子炉にかんする論文の
出版すら許されなかった。空白にされ
た無為の時間を潰すために、漢字を勉
強したというのは良く知られた逸話
だ。そして、数年後、自らが設置した
工科大学の講座からも排除されるこ
とになった。

チュルガイはオランダでの国際会
議の報告が評価され、アメリカのブル
ッキングス工科大学大学院へ招聘され
たが、当時の科学アカデミー通信技術研
究所は渡航を許可しなかった。アメリ
カから教授が三度もブダペストを訪
問し、当時の研究所長と談判した。そ
して、漸く家族をハンガリーに残す条
件で、動乱以後、博士候補生として初
めて、一九六六年にアメリカへの半年

の留学が許可された。さらに一年延長
が許可されたが、最後の二月月だけ、
物理学者で妻のイルディコの渡航が
許された。二人の子供をハンガリーに
残すという条件で。当時を振り返って、
チュルガイはグローフのことをこう
回想する。

「私は物理専攻で、アンドラーシユ
が化学専攻だったから、友人という仲
ではなかったが、一九六六年にアメリ
カに初めて留学で渡航した折、彼に連
絡しようと考えた。ところが、風の噂
で、アンドラーシユはハンガリーとの
関係を一切断ち切り、ハンガリー人
とは会わないと聞いたので、連絡するの
を止めた。

一九五七年二月のシモニイ教授の
心こもった語りかけは今でも忘れな
い。そして、シモニイ教授の息子チャ
ールズが、後にマイクロソフトに加わ
り、ビル・ゲイツの片腕になるとい
うのも、歴史の巡り合わせだろうか」。

INTEL への軌跡

青年グローブはニューヨークに着いた。当時、移民や難民の子弟が通っていたニューヨーク市立大学で、化学の勉強を続けた。英語はまったく話せなかったが、ロシア語で単位を稼ぐこともでき、一九六〇年に化学の学士号を得て卒業した。オペラ歌手になるという夢もあったが、ロスアンジェルスのカリフォルニア大学で化学の博士号を取得した（一九六三年）。

ちょうどこの頃、集積回路の発明者であるロバート・N・ノイスが、ゴルドン・E・ムーアと一緒にフェアチャイルド・セミコンダクター会社を設立し、アンドウリユー・グローヴが彼らと一緒に仕事をするようになった。それからの数年、グローヴは半導体にかんする数々の論文を発表し、六年間にわたって、カリフォルニア大学バークレー校で半導体の物理学を教えることになった。彼は一九六七年に、半導体の物理学と応用にかんする教科書

を出版している。

一九六八年にムーアがフェアチャイルドを離れ、INTELを創設し、グローヴが最初の従業員になった。一九七九年にグローヴはINTELの社長になり、次いで一九八七年にCEOに、そしてムーアが引退してからは、社長を兼ねた会長に選出された（一九九七年）。この三〇年間に、INTELはもっとも賞賛される全米第五位の会社になり、収益で第七位の会社になった。一九九六年の売上は二〇〇億ドルを

超え、利益は数十億ドルの記録を達成した。しかし、その道のりは平坦でなかった。

もともと、INTELはメモリ・チップを組み立てていた。最初の六四ビット・チップはわずか一センチ平方に収まるものだったが、二〇年を遡るコンピュータの黎明期には六四本の電子管で組み立てられていたものだった。暫くして、二五六ビットのメモリが続いた。一九六九年当時、これは技術の

驚異と見なされたものだ。一〇二四ビットのメモリ・チップによって、INTELは市場を統率することになり、グローヴが社長になった。そして、彼の著書 *High Output Management* は、一カ国語に翻訳された。

このブームの頂点で、日本企業がチップ市場に参入し、一九八〇年代半ばに高品質で安価なメモリ・チップで市場を席卷しようとしていた。この辺りの事情をグローヴはこう語っている。

「一九八五年の中頃のことだ。CEOのゴルドン・ムーアと私の事務所、我々の行く末を論じていた。我々のムードは暗いものだった。私は窓を見つめて、それからゴルドンの方を振り返って尋ねた。“もし我々が解雇され、役員会が新しいCEOを選出したとしたら、そのCEOはまず何をするとと思う”。ゴルドンは躊躇なく答えた。“彼らは我々をメモリから追い出すだろうよ”。私は彼を見つめた。少し麻痺したように。それからこう言った。

“君と僕がここから今事務所を出て、それから戻ってきて、それを自分たちやったらどうだろう”。そこで、実際にドアの外に出て、タバコを足で踏み潰してから、仕事に戻った。事務所に戻った我々が直面した問題は、“もし我々がメモリをやらなければ、いったい INTEL は何に特化すれば良いのだろうか”だった。

マイクロプロセッサは有力な候補だった。一九七〇年頃に、我々はマイクロプロセッサを生産していたことがあった。マイクロプロセッサはコンピュータの頭脳だ。メモリ・チップはたんにデータを貯えるだけだが、マイクロプロセッサは計算する。我々は当時 IBM コンパチのパソコン用に二八六マイクロプロセッサを供給していたし、三八六マイクロプロセッサはさらに大きな成功をもたらしていた。INTEL INSIDE というスローガン（一九八一年）は、このプロセッサが入ったコンピュータこそがコンピュー

タだという利用者に訴えるものだった。そこから、“三八六を持っているよ”というように手持ちのパソコンを語るようになったのだ”。

こうして、四八六マイクロプロセッサが続ぎ、さらに PENTIUM と名づけられた五八六マイクロプロセッサが INTEL によって発展させられることになった（一九九四年）。五〇年前、ノイマンはプリンストンのコンピュータ開発支援のために、百万ドルを要求した。PENITUM の研究・開発費用は一〇億ドルを超える。しかし、この時点でアクシデントが起こったのだ。

PENTIUM チップの浮動少数点計算の性能を見ていた数学教授が、除算エラーに遭遇したのだ。設計上のエラーはたいしたものではなく、平均的な利用者がこの問題にぶつかるのは二万七〇〇〇年間のスプレッドシート利用に一回の割だった。しかし、これはすぐにメディアで取り上げられ、「PENITUM にバグ」の大見出しにな

った。この小さなバグで、INTEL は六週間のうちに五億ドルの損失を被ることになったが、それは INTEL の利用者がそれだけ広がっていたことの証でもあった。そのバグは除去され、今では INTEL の利益は年間五〇億ドルにも達し、その成長率は三〇%にもなる。最新の PENTIUM Pro と名づけられた六八六は、一秒間に四億回の算術演算を行うことができる。この一〇年間で、コンピュータの性能は単位コストで見ても、百倍も向上しているのである

教授グロウヴ

グロウヴ教授はスタンフォード大学大学院で「戦略と行動」を教えている（異星人的な訛りで）。彼は物理学的なレトリックを使うのが好きだ。たとえば、屈折点への到達、カオスを支配させる、ノイズの海でシグナルを探す、新しい秩序の出現を待つなどがそのうである。

「古い戦略図が陳腐になり、新しいそれに道を明渡す所で、屈折点が現れ、ビジネスを新しい高みに押し上げる。しかし、その屈折点を通過する道のりを適切に操縦しないと、頂点を通り抜けてしまい、ビジネスは下り坂になる。まさにそのような屈折点で、経営者は迷い、こう考える。“何か違ってはいる。何かが変化している”。戦略的屈折点でうまく対処しないと致命的なものになる。

屈折点がまだ明瞭でないでしょう。このような時、どうやって適切な行動を取る適時的な瞬間を知り、会社や君たちのキャリアを救う変化を起こすことができるだろうか。残念ながら、それはできない。戦略的な屈折点に入りこむことは、混乱と実験の時期を耐え忍ぶことである。それはカサンドラの女神に耳を傾けること、賢明に議論を生み出すこと、組織がこれまで慣れ親しんできた管理のレベルを緩めることを必要とする。実践の段階では、

“カオスに支配させる”であるべきだ。カオス一般が良いというものではない。それはすべての参加者にとって、非効率的で消耗なものだ。しかし、実験やカオスの段階を経ずには、古い秩序は新しいものに道を譲らない。移行は被害をもたらし、個人の転換を必要とするだろう。つまり、すべてが生き残れるわけではなく、これまでの自分と違うようになれる者だけが生き残れるという事実を受け入れなければならぬのだ。そして、これに続いて、当初の漠然としたゴールに向かう新しい方向を、断固として追求するという時期がなければならない。

戦略的屈折点に突入するとはどのようなものかを思い巡らす時、いつも思い起こすのは、古い西部劇のお決まりのシーンで、馬に乗った放浪の一回が敵対する土地を通り抜けようとする場面だ。彼らはどこへ行くのか自分でも分からない。分かっていることは、もう戻れない、だからより増しな場所

に到達できるという希望に頼らなければならぬということだ。君たちや君たちの会社が奮闘し、場合によっては破滅しなければならぬような敵地は、死の峡谷のようなものだ。明瞭な戦略的決定なしで、会社を死の峡谷から脱出させるのは非常に難しい。もし競争が君たちを追いかけているならば（それは常時のことだから、パラノイドだけが生き残れるのだ）、君たちを追いかける人々を出し抜いて初めて、君たちは死の峡谷から飛び出すことができる。そして、君たちが彼らを出し抜けるのは、君たちが特定の方向に向かって、彼らよりも速く走ることで初めて可能になる。さもなければ、水とエネルギーが枯渇してしまっただろう。しかし、会社は間違っただけでは死なない。自らの方向性へ向かうことができないから、死を迎えるのだ。最大の脅威は、現状に止まることだ。死の峡谷の向こう側には新しい秩序がある。それは転換の前には見え

ないのだ」。

アンディ・グローヴは仲間内では「狂ったハンガリー人」として知られている。彼の著書 *Only Paranoid Survive* をライター・ドラッカーは、

「この恐ろしい著書は危険な本だ。人々に考えさせる本だ」とコメントしている。マッキントッシュを創ったスティーヴ・ジョブスは、「我々は戦略的屈折点を学ばなければならない。遅かれ早かれ誰もがそのなかで生きていくのだから」と記している。

忌まわしい想い出

グローヴがハンガリーとの関係を一切断ち、頑なにハンガリー人との交流を拒んでいることは良く知られている。チュルガイ・アルパードは、「アメリカに渡った後も、KGBあるいはハンガリーの秘密警察がアンドラーシュの動向を調べていたようで、それが彼を怒らせたとも聞いている」と話す。動乱で国外に脱出したハンガリー

人は二〇万人とも言われる。果たして、KGBであれハンガリーの秘密警察であれ、それだけの労力を割いて追跡する力と資金があっただろうか。

ジョージ・ソロスが体制転換以後の旧社会主義国を精力的に回り、支援しているのとは対照的に、グローヴはハンガリーを訪問することすら考えていない。それほどまでに彼の心に誓わせたものは何なのだろうか。ソロスもまた、第二次世界大戦中にブダペストに育ったユダヤ人だったが、幼児だったグローヴより八歳年上で、物心ついた年頃の少年はいろいろなことを体験している。それが後のソロスの生き方に強い影響を与えている。グローヴにとって第二次世界大戦時のハンガリーには忌まわしい想い出でしか残っていない。グローヴは、「この点で、ソロスとはまったく違う」という。

グローヴ自身、ハンガリー時代の過去についてほとんど語らないことでも知られている。一九九八年新年号の

TIME 誌はアンドウリユー・グローヴを *Man of the Year* に選んだ。そのインタビューの中で、グローヴは自身の過去について、語り始めている。

「時間の経過は何も僕に影響しない、と彼は強調する。とはいえ、夜も更け、スコッチと好物の寿司が、彼の口から秘話を滑らせた。

彼の父は一九四一年に消えた。労働奉仕団に駆り出されて、帰ってこなかった。何が起こったのだろうか。誰にも分からなかったが、東欧のユダヤ人男子は朝靄のように消えていくことは良く知られていた。そして、一九四四年三月にドイツがブダペストを占領し、グローヴが言うには、「彼等は我々を取り囲み始めた。母と僕は隠れていたのです、正確に言えば、ユダヤ人を、そうユダヤ人を取り囲み始めたのだ」。こう言って、グローヴは瞬き、スコッチを一啜りした。

彼の目に熱いものがこみ上げた。慎重に言葉を選びながら、強い訛りの英

語で話し始めた。“八歳だった。何か悪いことが起こっていることは分かった。でも細かな所まで、よく思い出せないんだ。母が僕を連れだし、これから違う名前になることの意味を説明しようとした。絶対に間違ってはいけないこと、自分の名前を忘れなければならぬこと、そして名前を書けと言われたら、書けないと言うことを教え込んだ”。こうして、彼はアンドラーシュ・マレセヴィッチになった。グローヴ家の母と息子は、盗んだ書類上で、キリスト教徒の家族の知り合いとすることで生きることになった。“こうすることで、彼等は非常に大きな危険に身を曝すことになった”と、彼は言う。テーブルを挟んで向こう側から、妻のエヴァがアンディを見やりながら、彼が迷い込んでいる新しい話に不安げな様子だった。“それで、彼等はいったいどうなったの”、“彼等とのコンタクトは失われたの”、とエヴァが尋ねた。彼は一呼吸置いて、首を振

った。“分からない。それほど彼等を良く知っていた訳ではないんだよ。おかしな事だが”。再び、テーブルに静寂が戻った。“でも、彼等は正しい事をしたんでしょう”と、私は問いかけてみた。彼はやや興ざめしたような独特のプラグマティックな仕草を見せた。もう乾いた目で私を見つめ、こう言った。“うまくいったんだから、正しい事をしたんだろう。だがそれでもし彼等が殺害されたとしたら、それは正しくない事だ”。

当時、多数の名も知れぬ善意が、ユダヤ人家族を助けた。グローヴもまた、こうした善意によって生き延びたのである。

映画時評

サボー・イシュトヴァーン監督

『サンシャイン』

(Sonnenschein, Napfény ize)

「メフィスト」でオスカー賞受賞のサボー・イシュトヴァーン監督の久々の大作。昨年末に封切り。原作の英語版は *Duna Plaza* で、ハンガリー語吹替えは各所で上映。五カ国の合作で、舞台はブダペスト。十九世紀末のハプスブルグ時代末期からハンガリー動乱直後の一九六〇年代にいたるユダヤ人家族の歴史の変遷を扱ったフィルム。

ブダペスト黄金時代

ハンガリーの現代史は一八六七年のオーストリア ハンガリー二重帝

国発足（歴史的和解）に始まる。日本の明治維新とほぼ同じ頃。ここからハンガリーの近代国家建設が開始された。日本と同様に、教育制度はドイツ

を真似て、ギムナジウム制度が導入され、とくにブダペストに創設されたギムナジウム（ミンタ・ギムナジウム、レアル・ギムナジウム、ファシヨリ・ギムナジウム）から二〇世紀の科学の発展に貢献した天才たちが輩出された。

とくに二〇世紀の最初の二〇年にブダペストで教育を受けた中から、数多くの天才が生まれたことは、今日でも科学史のなかの謎とされている。当時のハンガリー、いやブダペストは世界の中で、極めて特殊な位置を占めている。歴史的和解から第一次世界大戦でハプスブルグ帝国が崩壊するまでのほぼ五〇年が、ハンガリー、いやブダペストの近代黄金時代なのだ。

そして、そこで育った天才たちが最後にアメリカに渡り、原爆開発に従事することになる。維新をともしたハ

ンガリーと日本が、第二次世界大戦で原爆を通して出会おうという悲劇的な巡り合わせだ。

ユダヤとの混交

ハンガリーが生んだ天才のほとんどがユダヤ系の同化ハンガリー人であることは良く知られている。一八十九世紀を通して、ロシアやポーランドで迫害されたユダヤ人が、異民族に寛容だったハンガリーに流れ込んだ。二重帝国創設以後、ハンガリー政府はユダヤ人の経済的才覚を活かすことで、ハンガリー帝国の興隆を図った。経済発展に貢献したユダヤ人実業家は、貴族の称号を与えられ、一定の社会的地位が確保された。ノイマン、ヘヴェシ（ノーベル化学賞）、ヴィグナー（ノーベル物理学賞）などは裕福なユダヤ人実業家の息子として、高校卒業後はドイツの大学へ留学している。まさに、「サンシャイン」はこうしたユダヤ人実業家として成功し、ハン

ガリー人として同化しつつ、そのなかで様々な社会的軋轢にぶつかるユダヤ人家族の歴史変遷を、七〇年の歴史的時間を通して見せてくれる。もちろん、この映画はドキュメンタリーではないから、実在の家族がモデルになっているか定かではないが、少なくとも三代の息子たちの物語は、それぞれの時代の同化ユダヤ人が直面し、遭遇した事件を典型化したものだ。

反ユダヤの源泉は何か

ユダヤ人にたいする寛容さにもかかわらず、ハンガリー帝国には厳然としたユダヤ人差別が存在した。政治や行政へユダヤ人が加わることは厳しく制限されていた。だからこそユダヤ人は実業の道を究め、子息に高い教育を与えることで、社会的な地位を確保することに懸命だった。他方、一般庶民はユダヤ人家族の経済的成功を妬み、為政者がそれを巧みに操ることで、自らの政治体制の安定化を図った。

ガリー民謡「春の風」のバックグラウンド・ミュージックが交互に流れ、全編を通して、運命の出会いと美しい情景を飾っている。

主人公は **Sonnenshein** というドイツ系ユダヤ人の姓をもつ。曾お爺さんが発明した同名の薬用酒で経済的な成功を収め、息子（イグナツ）をウィーンの大学へ留学にだす。大学を卒業したイグナツはブダペストに戻り、裁判官の道を歩み始め、その有能さが評価されるようになる。ところが、高等裁判官になるためには、ユダヤ系の姓では駄目だと上司に諭され、そこで、兄妹三人で一緒に新しい苗字を考え、**Sors**（Fate、運命）という姓を選ぶ。この改名の様子が明るく描かれているのを見ると、当時の改名は朝鮮人の創始改名のような暗さのないものだということが分かる。この改名でイグナツの昇格の道は開かれた。

3人で育てられた兄妹のうち、妹は実は従姉妹だった。「妹」は次第に従兄に恋するようになり、やがて結婚するが、母は禁じられた婚姻だと「運命」を嘆くストーリーが張り込まれている。シューベルト「ファンタジー」とハン

ハプスブルグの崩壊から社会主義政府へ

やがて第一次世界大戦が勃発し、ハプスブルグ帝国が崩壊する。連合国によるハンガリー分割が、ハンガリーに民主政府を樹立させる。そして、それが崩壊した後に、ロシア革命に続く、歴史上二番目の社会主義政府が樹立された（一九一九年）。イグナツはブルジョア政府の官吏として自宅に軟禁されるが、イグナツの弟は医師として、社会主義運動に参加する。民主政府の樹立にともない、多くのユダヤ人が差別撤廃を目指して、政治運動に加わり、社会主義政府の樹立にもかかわった。バルトークやコダーイ、ルカーチ、あるいは高校生だったレオ・スィラルド（原爆開発者）も、社会主義政府の樹立や運動にかかわっている。

この社会主義政府は三ヶ月で崩壊し、その後には右翼軍事政権（ホルティ政権）が樹立される。この政府は社会主義者を片っ端から逮捕し、拷問し始

めたのだが、とくにユダヤ系の活動家はとくに標的になった。社会主義政府を樹立したユダヤ人への仕返しだった。

もつとも、ノイマン家などは、社会主義政府樹立とともにウィーンに逃れ、軍事政権樹立の後にブダペストに戻っているから、すべてのユダヤ人が迫害された訳ではない。しかし、この時から大学には定員法が施行され、大定員に占めるユダヤ系学生の数は、人口比率を超えないことが決められた。

イグナツの弟はフランスに亡命し、イグナツは不遇時代を迎え、ほどなく他界する。

両大戦間時代

ホルティ政権時代。イグナツの息子（アダム）が成長し、学校でのユダヤ人いじめからフェンシングを習い始める。やがて全国制覇を達成し、エリート（フエンシングクラブ（軍人クラブ）への入部を勧められる。そうすれば、オリンピックへの出場も可能になるからだ。しかし、ここでも障害があった。ユダヤ教からカトリック教へ改宗することが条件だった。エリート・クラブにユダヤ人が入ることは許されなかったからだ。ここでも二人の兄弟がともにカトリックの教えを受けに行く場面が映し出されるが、改姓と同じように、何のわだかまりもなく楽しく教えを受け、挙げ句の果てには結婚のために改宗教育に来ていた女性をアダムが横取りするというストーリーが組み込まれている。

そして、一九三六年のベルリン・オリンピック。ヒットラーが開会宣言をおこなったこのオリンピックで、ハン

ガリーのフェンシング・チームが優勝する。アダムはハンガリーの優勝に貢献し、西駅への凱旋帰国と市内パレードが、アルヒーフとロケーシヨンの重ね合わせで描かれる。

ハンガリー団体勝利の後、ベルリンのロビーでハンガリー出身のアメリカの実業家からアメリカへの移住を誘われるが、断るシーンがある。弟の妻がアダムを誘い、一緒にアメリカへ逃避しようという場面も見せられる。一九三八年から一九三九年にかけて、ユダヤ人の迫害が強まり、ドイツの占領とともにユダヤ人の収容所への送還が始まる。アメリカ行きは当時のユダヤ系ハンガリー人にとって、生きるか死ぬかの選択であった。

第二次世界大戦が勃発し、ユダヤ人の法的規定が発布された。事細かにユダヤ人の条件が定められ、公職からの追放が決められた。しかし、

国家に貢献した者は例外規定を受ける条項があり、オリンピック優勝者もそれに該当した。にもかかわらず、アダムは収容所へ連行され、息子の目の前でリンチを受けて死亡する。それはアウシュビッツでの出来事ではなく、ハンガリーの収容所でハンガリー人看守による仕業だった。

映画と直接に関係しないが、一九九

三年にノーベル経済学賞を受賞したハルシャーニイは、当時学生で、収容所行きの指定の列車に乗るよう駅へ集まるように指示された。映画のアルヒーフにも出てくるが、黄色いリボンを付けた収容所送りのユダヤ人が列を作って、列車に乗り込む。ハルシャーニイは列車の中でリボンのついたセーターを脱ぎ捨て、厚手のコートを羽織って、乗降客に混ざって駅を脱出している。ちなみに、彼がハンガリーを脱出したのは一九五〇年である。

このように収容所送りを逃れた人もいるが、優れた才能をもった科学者やスポーツ選手も、その多くがドイツ占領下の収容所送りで、アウシュビッツあるいはハンガリーの収容所で命を絶った。アダムの事例はその典型例である。

ナチからの解放と共産党政権の樹立

ソ連軍によるハンガリー解放で、収

容所で生き延びたユダヤ人が自由を
獲得する。多くの若者は共産党に入り、
新しい時代の担い手になるうとする。
一九一九年の社会主義政府樹立の時
と同じ構図である。アダムの息子（イ
ヴァーン）も、父を収容所で失った悔
しさを胸に、共産党の活動家になる。
ところがまたまた歴史は転換する。
戦後の一時的な平和が一転して、ソ連
とアメリカの覇権争いが激しくなり、
冷戦が始まる。ソ連共産党と占領した
諸国の共産党の内部で、アメリカやイ
スラエルのスパイ摘発運動が展開さ
れ、共産党員が共産党員を抹殺する事
態が展開する。イヴァーンは有能な共
産党員として、スターリンの誕生日を
祝うオペラハウスでの式典の司会を
務めるほどになり、他方で同僚のユダ
ヤ人をスパイとして摘発する仕事を
請け負わされるといふ皮肉な運命に
立たされる。

映画と関係ないが、ビタミンCの発
見でノーベル賞を受賞したセント・ジ

ヨルジは、戦中は反ナチの地下運動家
で、戦後の民主化の中で政府の科学政
策担当の指導的な位置に着いた。彼は
ユダヤ人ではないが、支援者の実業家
がスパイ摘発を受けた一九四八年初
めに、出張先のスイスからアメリカへ
亡命している。同じくユダヤ人ではな
いが、反ナチ運動を担ったパイ・ゾル
ターン（通信工学）も、一九四七年に
ハンガリーを離れている。

一九四七年からスターリンが死ぬ
一九五三年まで、スターリンの絶対化
が進行し、悪夢のような時代が続いた。
国中がオウム真理教になった状態だ
と考えれば良い。明らかにこれはナチ
ズムの完全な裏返し現象だった。

一九五六年動乱

スターリンの死後、緊張が緩和する
時代に入った。一九五六年秋はまさに
そのような時期だった。しかし、突発
的な事件から動乱が始まる。社会の緩
みがそれまで鬱積した不満を爆発さ

せたのだ。戦後のスターリン時代を通
して、矛盾する境遇に陥り、何かが問
違っていると疑問を抱きつづけてい
たイヴァーンは、動乱の中で反スター
リン主義と自由化への道を訴え、大衆
を扇動する。

動乱で国外に逃げた若者は二〇万
人に達している。当時、ブダペスト工
科大学の助手だったオラー・ジヨルジ
ユもこの時に国外に逃れ、一九九四年
のノーベル化学賞を受賞している。ま
た、工科大学学生だったグローヴ・ア
ンドラーシユは友人とオーストリア
国境へ逃げた。現在は「MEFO」会長で
ある。

動乱の扇動者は残されたフィルム
から特定された。保安隊や共産党幹部
のリンチ殺人にかかわった者は死刑
判決を受けているが、余程の残忍な殺
人を犯している証拠がない場合には、
一九六〇年代の米ソ雪解け時代に釈
放されている。イヴァーンもまた、比
較的早く拘束を解かれた。

イヴァーンが釈放されて真つ先に行つた所が、改姓受付事務所だった。「改名の理由は何ですか」と聞かれるが、一言で答えられるはずがない。

Sonnenschein に戻ったイヴァーンは、太陽の光を体一杯に浴びて、すがすがしい気持ちで、再出発の一步を踏み出す。

テーマは重い

フィルムを通して、古き良き時代のブダペストが映し出される。ハプスブルグ時代のカフェが、第二次世界大戦後にセルフサービスの食堂に改造される様子など、細かな時代配慮が施されている。ハプスブルグの伝統がロシア的な非文明的な野蛮に壊されていく様を見るようだ。

美しい映像と音楽に似合わず、テーマは重い。これはたんにユダヤ人問題ではなく、二〇世紀に犯した人類の犯罪の集大成を見るようなものだ。ナチズムにしてもスターリニズムにして

も、そして反ユダヤ主義にしても、共通していることは社会的少数者を生け贄にすることで、為政者が自らの支配を守ることだ。

そしてそうした支配を容易にし、時には積極的に支えるのが、凡人大衆だということだ。ユダヤ人の経済的な成功を妬み、他方で為政者と一緒になつて差別することで劣等感を優越感に転換しようという大衆凡人の拙い知恵が、独裁者の存続を支える。アダムをリンチしたハンガリー人看守、それを無抵抗に見守つた数百のユダヤ人収容者。戦後、フランスから戻つたイグナツの弟がイヴァンに、「それだけの数の収容者が居て、数名の看守の暴挙をただ見ていただけなのか。どうして暴動を起こしてリンチを止めさせなかつたのか。多少の犠牲者は出るが、騒ぎを起こして脱出することもできたはずだ」と問う場面がある。オウムもリンチも同じではないか。

しかし、これは何も特定の思想や政

治体制に固有のことではない。すべての「いじめの構造」やファナティックな運動に共通するものだ。オウムのようなファナティカルな集団も、基本的に同じ構造である。それは何も特殊な出来事ではなく、凡人大衆が容易に填つてしまう畏なのだ。

人が自らの信念を貫くことの難しさは、日常生活のあらゆるところで遭遇するところだ。多数や集団に身を任せることから、容易に「いじめの構造」が形成される。人類がこうした世界から脱却するのは何時のことか、そんなことも考えてみた（盛田記）。

掲 示 板

次号特集の原稿募集

夏期集中授業の講師及び期間付講師の募集。

資格 教員免許状有する 又は、教育・教職経験があること。

期間

夏期集中授業講師：六月十九日～

七月一四日

期間付講師：八月二八日～

二〇〇一年三月三一日

詳細はブダペスト日本人補習校まで

連絡先

電話 / F A X 200 8856

「ドナウ通信」の次号は、「私のハンガリー」と題した特集号とします。

ハンガリーでの経験、生活、悩み、楽しみなど、身近な話題をテーマにした原稿を募集します。

原稿の長さは問いません。FAX、e-mail、郵便などで原稿をご送付ください。締切は6月末。

皆様のご寄稿をお待ちしています。

編集室より

ハンガリーを離れられた方に e-mailで「ドナウ通信」が送れます。編集部までご相談ください。

次号の締め切りは、六月中旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 266-4967

e-mail: t-morita@ungary.net